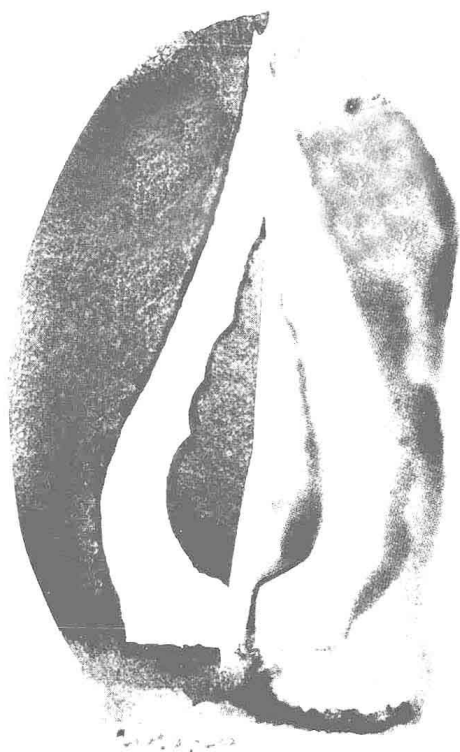




# 貝紫幻想

芝木好子



河出書房新社

貝紫幻<sup>かいむらさきげんそう</sup>想

初版印刷 昭和五十七年四月二十日

初版発行 昭和五十七年四月三十日

著 者 芝木好子

装幀者 江見絹子

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三三―二

電話 東京 四〇四―四一―二〇一（営業）  
四〇四―四一―八六一（編集）

振替 東京 〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

©1982 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

# 貝紫幻想



週末毎に帰る鎌倉の家は、小さな山を背にした谷の中にある。バスを降りて、古びた神社のわきをぬけて傾斜になった木立の道に入ってゆくと、まばらな人家の間に竹藪が見えてくる。圭子はここまで来るとほっとして、青葉の匂いを嗅ぐように陽に向って顔をあげた。子供の頃から暮した家や、まわりの自然はまだ損われていない。一週間の間、東京の出版社の編集部でめまぐるしく働いていると、心身とも渴いてしまい、金曜日の夜はからっぽの身体を引きずって戻るのだが、それになにかの都合で帰りそびれることがある。昨夜も仕事の続きで新宿へ出たあと、もう帰ろう、最終電車に間にあう、と時計を気にしながら、結局立上れずじまいだった。留守の母に電話もしそびれた。

母の雪子からはめったに連絡のくることもない。彼女は谷の中にいて山の精にでもなったように動じない。一家が越してきたのは身体の丈夫でない雪子のためで、圭子の小学生のころだった。ものさびしいが、静かで澄んだ自然が雪子の気に入って住みついた。この二十年というもの圭子の父の桐原隆は商社の海外の仕事で留守勝だったし、東京の本社にいる間も夕方真直に帰宅することは

少いので、いつも圭子は母と二人暮しであった。風の立つ夜の木々のざわめきは子供の時分おそろしかった。頭巾をかぶった老婆姿の狼がやってきそうな不安があった。彼女の母はトランプの一人遊びを九歳の圭子に教えた。それでも落着かないと、花札の相手をしてくれた。さくらや坊主や雨の札をめくると、ほら二十が出た、という。圭子はこの遊びが気に入った。手役もすぐ覚えて、母を相手にこいこいをするようになった。二人の間へ座蒲団を置いて、向きあって花札を打つ。圭子が出来札を作ると雪子はいっしょによるこんだりする。勝っても負けてもおもしろければよかった。花札の一年が上るとそれで二人のあそびは終り、圭子は追い立てられて寢床へゆくが、あと母はどうしたか知らない。雪子は時々病氣をして、腎盂炎で高熱の出ることもあったが、じっと寝ていて苦しいと訴えることもなかった。いつからか母は手機てばたを習って一、二年織っていたことがあるが、熱中しすぎて父に止められた。手機は鎌倉に住む工芸家に教えてもらったもので、機はやめたが、時折そこで糸を分けてもらい、組紐を習うようになった。色糸の組合せがずばぬけてよく、圭子は少女なりに母の紐は美しいと思った。

家にはいつも母がいるが、時には深閑として無人の家のような寒々しさをおぼえることもある。探して歩くと雪子は納戸に坐っていて、窓からぼんやり裏山へ目をやっている。

「ああよかった、お母さんが居て」

放心したような母をよぶと、振返って、微かにわらうのが、違った顔に見える。雪子は子供の教育に打込むこともないし、夫の身のまわりもこまやかに世話したりしない。外国で一人暮しに馴れた桐原はなんでもひとりでする。父と母には領域があって侵しあわないようにみえるし、とりわけ

母にはうかがえない世界があった。何時間も裏山に目をあてていると、中空に白鳥でも舞うのかと覗いてみずにいられた。いつだったか、久しぶりに父がバグダッドから帰ってくるという日、母が相変らず紐を組んでいるのをみて、圭子は言ったことがある。

「お母さんで冷たいひとね。修道院へ行ったほうがよかったみたい」

痛烈な言葉に雪子はひるんで手を止めたが、修道院ねえ、と妙に感心した顔をした。しかし父と母が冷たい関係というのでもなかった。圭子は高校生になると油絵に興味を持って描きはじめた。

（あのまま絵を描いていれば、よかったかな）

圭子は勤めの仕事に消耗すると、十年前の自分を思いうかべる。かなり本気でめっていたが、父がいつになく強硬に反対して、押しきられた。こんな時母は口添えもしなかった。あとまで悔いたが、罷めたのはやはり本物でなかった証拠かもしれない。

彼女は竹藪を越えて、ふと道のわきの家に目をとめた。いつも門を閉した築地塀の家が今日は裏木戸をあけて、植木やが出入りしている。老いた植木職は今伐ったばかりとみえる一本の木を引きずってきた。直径三十糎ほどの立派な木である。根っこからすっぱりと伐られた生々しい切り口を見て、彼女は寄っていった。樹皮から赤っぽい樹液が滲んで、鮮烈であった。なによりも樹皮はまだ呼吸をしているのだった。

「この木は、なんの木でしょうか」

彼女は植木やに会釈して訊ねた。

「これは榛はえの木だね」

「樹液がきれいですね。私に譲っていただけませんか。この先の桐原ですが」

植木やは手を休めた。

「なんにしまさるね」

「染料にしたくて。色が出るかどうか分らないけど、木肌へ樹液が赤くにじんでいるでしょう。まだ生きていますもの」

幹の年輪へまわりから一廻ほど赤くぬれているのを、植木やも見た。

「木の皮を煮るのかね」

「ええ。やってみようかと思って」

「持ってゆけるように、切ってあげるよ」

圭子は植木やの好意にはっとしながら、心配でもあった。榛の木が染料になるとは聞いていなかった。植木やと約束が出来ると彼女は礼をして、気負う気分になっていた。道の先を折れた行き止りが彼女の家である。玄関に立つと、雪子が出迎えにきた。いつも化粧らしいものをしないが能面の小面のように皮膚にぬめりがあって、今日はとりわけ色白くみえるのは、藍染めのきものを着ているせいであった。

「お帰り。昨夜は待ちぼうけよ」

と雪子は言った。

「ゆうべは飲みすぎて頭が痛いわ。今朝は牛乳も飲まずに飛んで帰ってきたのよ」

「御飯くらい食べさせてあげますよ」

雪子は自分から奥へ行った。圭子はうしろから母の肩へ顔を近づけた。藍の匂いがする。

「このきもの、珍しい燈籠や木や飛び石が模様なのね。もめんね」

「山陰の弓浜紵、手織りですって。一べん藍を建ててみたいわね」

「へええ、紺屋でもやりますか」

母ならやりかねない、と圭子は思った。華奢な身体や、おだやかな顔に似ない意地の強さや、辛抱のよさを持っている。自分の好きなことは飽きずに深入りする質で、圭子は母が機を織っている姿を良いなと思っていた。機を止められると組紐に替えて、そのうち糸を好きな色に染めるまで凝るようになった。染めたい植物染料を漢方薬店で買ってきて、糸ばかりか布も染めて、早縫いで圭子の服も作る。それも近頃は裏山を歩いて自分で植物を採取してくるようになった。誰に頼まれるわけでもなく続けてきたから、難しい藍もその気になれば建てようとするかもしれない。

居間に寛ぐと、圭子は母の顔を見た。雪子は一週間ぶりの娘をちやほやするでもなく、お茶の支度をしている。家の中は余分な飾りがなく庭もさっぱりしていて、母が居ると、それはやはり圭子にとって我が家であった。インドのカルカッタの父から連絡があったかと聞くと、電話があったという。桐原は便りを書く代りに短い電話をよくすだけの男であった。古びた家は手狭だが、一家の主人が不在勝なので気にならない。圭子はお茶とカステラで一息ついた。

「いま、その築地塀のうちに植木やさんが入って、木を伐り倒したのを見たわ。樹皮が厚くて、そこから赤というか、オレンジ色がじわじわ出ているの」

雪子は手をとめて、娘の話をうながした。

「あの樹皮なら鮮やかな色が出そうなの。だってもう樹皮は血を噴き出しているのですもの」

彼女がなぜ樹皮に目をつけたか、雪子は思い当たっていた。

「なんの木なの。大きい木では無理よ」

「一本の榛の木の樹皮で、かなり染料はとれると思うわ。譲ってもらいましょうか。お礼をちょうだい」

圭子は片手を出して五千円札を要求した。

「いやなら、三千円でもいいわよ」

「分った。圭子はもう話をつけてきたのね」

「三千円の値打は充分あるわ。私は千円ぶんばつしてきたけど」

今から見にゆかないかと圭子は母を誘った。倒れた木は刻々に死に急いでいる気がした。雪子もその木の抱く血の涙に惹かれながら、別のことを言った。

「自分で樹皮を剥いで、煮てみなさい。良い色が出ると信じたのだから」

圭子はひるんだ。まだその作業をしたことがない。久能泰男は今度いつたずねてくるだろうか。榛の木の樹皮を扱ったことがあるかどうか、電話で聞いてほしい、と言ってみたが、雪子は取りあわなかった。泰男は雪子の異母弟であった。

京都に住む彼から二十何年ぶりに手紙が来るまで、雪子はその存在さえ念頭にないほど縁の薄い姉弟であった。雪子の父が死んだ時、後添いであった泰男の母はまだ若かったので、子供をつれて離籍して京都の実家へ帰った。泰男の手紙は長い空白を埋めようと、熱意の籠るものであった。近

年母の健康が捗々しくなく、自分の元気なうちに一度うかがって、御無沙汰のおわびをするようにとしきりに言う。長年音信もとだえがちで突然にどうかと迷ったが、お許し願えるなら鎌倉へ上りたい。自分は時折仕事上の研究会があつて上京するので、その前後だと好都合である。申しおくれたが自分は京都の美術大学工芸科の専任講師をしている、と記してあつた。

手紙は雪子を当惑させた。煩わしいことのきらいな、浮世の外で暮しているような彼女は、係累の出現を好まなかつた。どうしたものかと考えこむのを圭子はおもしろがって眺めた。兄弟もなく肉親の縁に薄い圭子は叔父の出現を明るく受止めて、想像をたのしみさえした。雪子も泰男と暮したのは彼の六歳位までであつたから、顔を見分けられるかどうか分らなかつた。ことによるとお荷物を背負うかもしれない、と悔いはじめていた。

ある日久能泰男は鎌倉へたずねてきた。圭子が玄関へ出ると、痩せて長身の三十過ぎの男が立っていた。顔を一瞥するなり、まぎれもなく母の弟と悟つた。やはり顔の輪郭や眼差が似て、母の最も近い血縁の、まだ青年らしさを残した男がそこにいた。雪子が奥から出てきて、立っている男に目をあてると、息をのんだ。男も緊張して仰いでいる。圭子は「御対面だ」と思いながら、姉弟の万感こもる一瞬に感動をおぼえずにいられたかつた。雪子の表情がやわらいでいった。久能泰男は間もなく奥へ通された。

彼は雪子と圭子をそれとなく見比べていた。六歳で桐原家を去つた記憶に、父と、病気の兄と、姉とがまじりあつている。離れの病室に兄がいて、そこから足早に出てくる姉の姿が印象的で、いつも宙をみつめるように思い詰めていたから、声をかけそびれた。姉は弟に一言、二言話しかける

こともあるが、母屋の用事を済すとまた離れへ去ってゆく。クレゾールの匂いのする病室へゆくのを彼は禁じられていた。その頃の雪子と今の圭子は同じ年恰好で、そっくりに思えた。歳月が移ろっていったのは確かであった。雪子も泰男の上に死んだ兄のある表情をみていた。

女だけの家に泰男は親しさをおぼえていた。彼の母のみや子は数年ほど前から雪子の名を口にして、会いたい気持を抱き続けていた。しかし兄と父を続けて亡くした雪子をおいて出てきたから、なにも言えた義理ではない。年をとって重い病気で手術をすると、みや子の気持は据って、泰男に手紙を書かせた。

「手術のあとの具合はよろしいの」

雪子がたずねると、彼は曖昧に答えた。

「今はぶらぶらしています。起きているうちに一度京都へ来てもらえませんか。ぼくはまだひとり者で母を見てやるのが出来ないのですが、今度は鎌倉へ伺って、なによりも母をよろこばすことが出来そうです」

彼の言葉からみて病人は早く見舞わなければならないようだが、雪子は昔の話をすることも、京都へゆくことも気が進まなかった。

「あなたの専門のお仕事はなんですか」

と彼女は話を逸らした。

「ぼくは染織工芸の歴史をやっていますが、実物を見るほうが好きですね。ある時正倉院の板締めを見ると、あまりにすばらしい色で魅了されました。ぼろぼろの布片の唐花文様の紫紅色が枯れ

もしません。天平時代のもので、染めは難しい技術だと思いましたが、これが分らなければ前へ進めない。源流を探って科学的に解明しようと決めたのです。それ以来染料の成分や、技法を調べることからやり出しました」

「植物の色の種類は多いでしょう」

「世界に三千種もあるのです。母の実家は染色工場ですから種類ごとに調べられるし、奈良の寺の古い布の復元をお受けしているのも、大事な勉強になるわけです」

「早くから染色の眼を養われていたようね」

「それもあります、自分では真樹兄さんの絵の才能にいくらあやかっている弟でありたいですね」

雪子は黙った。泰男にもそれを言うだけの血は確かに流れている。川瀬真樹は美術大学を出たあと長いこと病んで、二十八歳で死ぬまでの絵も多くはないが、良い絵を描いて識者の間に今も忘れ難い画家として記憶されている。画家と泰男の仕事は色の表現で共通している。雪子も素人の物好きで色を染めることがある。

「植物はなにを染めます」

と泰男は興味を抱いて訊ねた。

「言うほどの種類はありませんよ。遊びがてらに裏山で梔子くちなしの実を摘んだりするのだから」

「ぼくも学生とリヤカーで野原へ採取に行ったり、椿の多い寺へ剪定のあとの枝を貰いに行ったりします。花も実も木の皮も役に立つ。花の蕾を育てる時の木は、すでに豊かな母性があって、花よ

り早く体内に花の色を溜めているのです」

木の皮ばかりか枝にも発色の要素がある、とは雪子にも圭子にも思いがけないことだった。

「もちろん花の木のすべてとは言えませんが。試みたのはわずかですから。しかし植物には無限の可能性があるので、興味は尽きません」

「天然の染料は深い味が滲み出ますもの」

泰男と雪子の間に共通の話題があるのは、偶然とは言いながらふしぎであった。そばで圭子は三人の兄妹の縦糸を繋ぎながら、分ちあった血の濃さを感じないではいられなかった。羨しい光景であった。

泰男はしばらくして土産にと持ってきた二枚の布地を取り出した。見事なインド更紗であった。

雪子と圭子にあてたもので、気に入るかどうかと心配しながら差し出した。インド更紗はどちらも花模様で、一枚は茶の濃淡に黒をおき、他の一枚は紅色をからませていた。鮮やかな中に深い味わいがある、よく見かける捺染のものと品格が違っていた。

「見事なこと。インド更紗の古い物でしょう」

雪子は惹かれて手にとった。

「そう見えますか。ありがたいな」

「インドで探してきたに違いないわ」

「実は、ぼくが染めたのです」と彼は笑っていった。

長いこと彼はインドの染織を専門に調べてきた。染色の発祥をたずねてだったが、古いインド更

紗を調べることは、世界の染色の歴史を知ることにつながった。インドへ再三行ったあげく、自分で染めた試作品であった。

「あなたはよほど凝り性なのね」

雪子は娘と顔を見合せた。泰男は気に入ってもらったのを喜んだ。

「母は帯地を染めて持って上るとよい、といったのですが、ぼくには記念の更紗ですから。これはインドで更紗の木版を求めてきて、天然染料で染めたものです。インドの旅では収穫もあったが、ひどい目にも遭いましたよ」

それに比べると高校生からアルバイトで覚えた染色はよほど楽である。圭子がきものに興味があるなら、帯でも訪問着でも好きな絵柄を描いて染めてあげたい、と馴々しくなるのに気を配りながら彼は言った。圭子は彼の染めるきものを想像した。

「きものは母の領分で、私はめったに着ませんの。うちの母は娘に入れ揚げて衣装をこしらえるようなひとではないし」

「そうかな」と泰男は信じなかった。

圭子は染色の成分を研究する男の作ったインド更紗のもめん地をやはりうれしいと思った。

午後おそく泰男を送りがてら鎌倉の町へ食事に出たのは、雪子には珍しいことだった。泰男との初対面は思いのほか打解けたものになった。しかしそのあとに京都のみや子を見舞うという約束が生れて、それは断りきれなかった。彼の真情を無下にも出来ない。食事で気持がほぐれると、雪子は身内という感情を味わいながら訊ねた。たいそう若くみえる彼が三十五歳で、まだひとりでいる

のは母親のためかと。泰男は考えていた。

「家に落着かないからかな。それとも縁遠い男なのかな。近頃母はなにと言いません」

「うちにも似たような娘がいますよ。私はそれは自由にしていいと思っていますけど」

雪子は持前の冷淡とも無関心ともとれる声で言い、彼をおどろかせたが、圭子は馴れていて気にもしなかった。

その日から三週間も経ったが、雪子はまだ京都行の腰をあげようとはしなかった。圭子はむしろ行ってみたいと思いはじめていた。泰男の仕事や生活を知るのも興味があったし、義理の祖母であっても、祖母という存在にふれてみたくなっていた。泰男が現れてから家の中は目に見えないほどに変化が生じて、眠った空気が動きはじめたように、彼のもたらした別の世界が意識の中を走ってゆくのであった。

夕暮近く、築地塀の家から植木やがリヤカーで榛の木を運んできた。持ち運び良いように四十糎ほどの長さに切ってきてくれた。雪子は一目見て満足した。

「立派な木だこと」

「これで樹齢八十年は経ってまさあ。増築のために惜しいが伐った木で、可哀そうな気がしていたところだから、染料になるってのは結構だ。残った株はどうなるね」

「芯材は燃やして灰にします。染色に大事な灰汁あじになって役に立ちますよ」

植木やは帰ってゆき、雪子はなにがしかの礼をした。幾個にも分けた木の株は新しかった。圭子が滲んだ血の色を自慢すると、雪子は笑って領いた。娘の目は節穴ではなかった。しかし泰男に教